姉と俺（と母と父）

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉と俺（と母と父）

【Nコード】

N2626R

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

これまで掌編小説として短編で投稿していた物をちまちまと連載していきます。

一話一話が完結しますが、ある流れに沿って話は進行していきます。

蝕む身体

『ある晩、俺の身体に取り憑いた悪霊は、俺の身体の中を熱く焦がしていった。身体の中だけでは物足りないらしく、頭の中まで入ってくる。俺の頭は重くなり、定期的に訪れる痛みに「うう！」と唸り声が出る。身体は熱く燃えたぎり、細部に至る関節にまで痛みが生じる。ああ！俺の身体は、どうなってしまうんだ！』

「ハア。あんた、いつまでそんなくだらない妄想にふけっているつもり……。ただの風邪でしょ！薬飲んで早く寝なさい！」

そう言つと姉は、水と薬を置いて部屋から出ていった。

『アネキ。そんな陳腐な言葉で俺の心を虐めないでくれ!!』

「マジで、しんどくなってきた。薬、薬っと。あゝ寝るか」

水計画

『人間は一週間何も食べなくても、水（水分）さえ飲んでいれば死ぬ事はないらしい。よし！！ 今日から一週間、水とお茶だけで生きてみてやる！ まず初めに今日の晩メシを食わない事から始めるか。っと新たな挑戦を宣告しておかないといけないな』

俺はルーズリーフを一枚取り出し、マジックペンで「今日から一週間水生活します」と大きく書くと、部屋の扉にセロテープで家族に見えるように貼り付けた。

『よし！ これでOK！』

夕方になりアネキがノックも無しに入ってきた。

「あんだねえ。ガンジーにでもなるうって言うの？ 無理無理。もうすぐ御飯だからね！」

そう言い残すと、そそくさと部屋を出て行った。

『アマいな。アネキ。今回はマジでやる気アリアリだぜ!』

と部屋から一歩も出ずに、お気に入りのコミックを一巻から読み返す。

少しの間があり、人の気配を感じ頭を上げると、そこには真っ赤な顔をした《鬼》が……いや、母親が立っていた。

「何……?」

と言った途端

「御飯出来たわよ!! 断食したいなら自立してからやりなさい!
! 作る人の事、ちよっとは考えなさい!」

と《雷》いや《稲光を伴った稲妻》が俺の頭上に直撃した。

「は、はい……!」

そうして、俺の一週間計画は水の泡と消え去った。

『水で一週間だったから、水の泡？　ぷぷぷ。　はあ、笑えねえ……』

部屋を出た俺が最初に見たものは、【今日から一週間水生活します】と俺が書いた文字の上に赤字で【一人でしなさい】と乱雑に書かれた《鬼》の文字だった。

『怖えええ！！　メシ食いに行こ……』

その後、俺は父親と母親に挟まれ、土下座のまま平謝りしたのは、言うまでもない……。

シンクロ

「小説ってさ。長い文章の事だけだと思ってたら、短い文章でも短編とか掌編っていうのもあるんだってさ。でよ！俺もその掌編ってのを書いてみたんだ。見てくれよ」

俺はそう言っつて、数枚の原稿用紙を姉に差し出した。姉は「ふうん」と言いながら、原稿用紙に目を落とした。

【暗い夜道を一人の女性が歩いていた。彼女は仕事帰りらしかった。女性が家の近くの公園の側まで行くと、公園の中で蠢く影を発見した。女性は不思議に思い、近付いていった。すると、突然その蠢いていたモノは彼女に襲いかかった。それは口から血を滴らせた男だった。彼女はとっさにポケットの中の携帯を取り出すと、男から少し離れた所へ行くと電話で何やら話始めた。暫くして、男の傍へ戻ってくる】

「大丈夫ですか？ 今救急車を呼びましたので！」

と男の背中をさすり始めた。男はどうしていいか分からず、その場につづくまると、女性にただただ背中をさすられていた。暫く経って救急車がやってきた。救急隊の人はその男に近付くと、少し話をしてから女性に話し掛けた。

「犬。喰ってたんですよ。吐血じゃありませんでした。今度からよく見て通報して下さい！」

そう言い残して去って行った。

「犬。食べてたんですか……？」

彼女が尋ねると、男は

「腹が減って」

と答えた。

「そう。時間を無駄にしたじゃない！」

そう言っつて女性は男に一蹴を浴びせると、家に帰っていった。

男はただ、口から犬の血を垂れ流しながら立ち尽くしていた。】

「これ。何が面白いの？」

読み終わったのか姉が聞いてくる。

「なんとなく書いてみた」

そう答えると、

「バツツカじゃない！？ 時間の無駄ね！」

と言い残して部屋から出ていった。

俺は投げ捨てられた原稿用紙を、ただ見詰めているだけだった。

『……っつておい！ これ、犬喰つてたヤツと俺同レベル？』

仏への道

『この世の真理は、無限の宇宙そふに在り。……今、眼まなこに映る現実が、この世の真理の現実ではない筈だ！ 俺は今、無限の宇宙そふと同化を行い、凡人には見えぬ、世界の真理を我が眼まなこに映うつしだすのだ！……心頭滅却すれば火もまた涼し。……疾ときこと風の如く、徐しずかなること林の如く、侵おかし掠かすめること火の如く、動かざること山の如し。……光陰矢の如し。……いや、これは違ちがう。……悟りだ。悟りをひらくのだ！……ほら、……見えてきた。……見えてきたぞ。……ばあちゃん……、ばあちゃんが手招きしてる……。ああ！ ここは違ちがう！ 悟りをひらくつもりが、死後の世界へ通じてしまった……。無心。……無心に徹するのだ！！』

「……！！ ちよっ……！！！」

「……」

「あん……！！ ……てるの……！」

『何やら、うるさい小蠅こぶんがおるようじゃの。無心じゃ。無心なのじゃ……』

「……！！ ……もっ……！！！」

『おつちやくどいぞへ行きよったか。無心。無心に徹するのじゃ……！』

「お母さん！！ アイツが！ アイツが！！ 井出らつきよになっちゃった！！」

『誰が井出らつきよだ！！ あ！！ 無心……が……』

「へへ、そうなの？ あの子ったら、井出らつきよになっちゃったんだ」

『母さんまで！！ あゝ！！ 悟りが遠ざかっていく……』

俺は座禅を組むのを止め、部屋から顔を出すと大声で叫んだ。

「誰が井出らつきよだ！！」

ライチ

『おおー!! こ、これが……! かの有名な楊貴妃が食べたという……。ん? いや……クレオパトラだったな? いやいや、違う。……小野小町って事は……、ないないない。うん。やっぱりそうだ! 楊貴妃であってる。……これを食べれば俺も……』

「あんた何泣きながら、ライチ貪り食べてるの!？」

いつの間にか、俺の前に姉が立っていた。

「あつ! アネキ! ……聞いてくれよ! 俺、この前のバレンタイン。一つもチョコ……貰えなかったんだ」

「で……、ライチを食べて美男子になろうと?」

「そうさ! かの有名な楊貴妃も美しさの秘訣の為に食べたという幻のフルーツ! これ以来年、女子達を見返してやるんだあ!」

「本っ当に、あんたバカね。そんなの食べたからって、美男子になるわけないでしょう」

「アネキに俺の気持ち分かるのかよ!」

「だからあゝ。泣きながら食べなくても、いいじゃない……。それに、あんたチョコレート貰ったじゃん」

「いつ!? 誰に!？」

「あげたじゃん。わ・た・し・が……」

そう言って姉は部屋から出て行った。

『……チョコって、ポッキー1本じゃねえか!! 俺ってどこまで、惨めなんだ……』

ライチを食べる手も止まり、ただうなだれるしかなかった。

「ねえねえ母さん聞いてよ。あいつつたらさ、バレンタインにチョコ貰えなかったからって、泣きながらライチ食べてるのよ。バカだと思わない?」

「そう? あっち見てご覧なさい。父さんもチョコ貰えなかったらしくて、今泣きながらレモンパックしてるわよ」

「も〜! 父さんまで! 私がポッキー1本あげたでしょ!」

勉強

「あんたさあ、私の話聞いてる？」

「……………」

「ちょっと！ あんた、お姉ちゃんの話が聞けないって言うの！？」

「……………」

「いつまで無視するつもり！？ ちょっと！ 聞いているの！！」

「……………」

「話、聞きなさいよ！！ 聞きなさいって言うてるの！！！」

「だあ！！ うっせえ！！ 見て分かんねえか！！ 勉強してんだよ！ 勉強！ 邪魔すんなよ！！！」

俺は参考書のページをめくると姉にそう叫んで、また参考書に目を落とした。

「勉強お！？ あんたが？ 見てるふりでしょ！ 私の話聞きたくないから！！」

「うるせえ！！ 勉強の邪魔だ！ 出ていけ！！」

俺が大声で怒鳴ると、姉は急いで部屋を飛び出して行った。

『ふう！ これで静かに勉強出来んな』

と、その時部屋の外から大きな声が聞こえてきた。

「お母さ〜ん！ 大変！！ 大変だよ！ アイツが！！ アイツが真面目に勉強してるの！」

『なんだよもう！！ 何故勉強してるくらいで、そんな言われ方しなきゃいけないんだ！』

俺はムカついたが、今は勉強に集中しようとした。

「えええ！！ あの子が勉強！！ 嘘でしょ！！ お父さん！ ちよつと！ 聞いた！？ あの子が真面目に勉強してるんだって！」

『母さんまで……。大袈裟な……。』

「何！！ アイツが勉強しているのか！ 母さん！ 今すぐ救急車を呼びなさい！」

「分かったわ！ あの子、頭がおかしくなったのかしら……」

『父さんまで……。って何！？ 俺の扱いってどうなってんの！？』

この時既に、勉強など、もうどうでもよくなっていた。俺は参考書を閉じ、頭を抱え込んでいた。

「お母さ〜ん！ 大変！！ 大変だよ！ アイツが！ アイツが勉強のし過ぎで頭抱え込んでる！！！」

『てめえらの……せいじゃねえ……か……』

いつの間にか、俺の目には涙が溜まっていた。

イメージ

『部屋の雰囲気は、家具や机の配置だけでなく、壁紙の色や装飾品で変化する。部屋の壁紙を貼り替える事は出来ないから、ポスターやカーテンでイメージチェンジだ!!』

「ねえ。ちよつと聞いていい？」

毎度の事ながら、ノックもせずに入ってきた姉が何か言っている。

「ん？ 何？」

「何？ ……これ」

姉は壁に貼ったポスターや窓際のカーテンを指差している。

「アネキ……ポスターも知らねえのか!？」

俺が呆れた声でそう言うと、姉は部屋を飛び出して行った。

『一体……なんだって言うんだよ!!』

と思っていると、暫くして部屋の外からまた大声が……。

「お母さ〜ん! 大変!! 大変だよ!!」

「どうしたの？ そんなに大きな声を出して」

「アイツがとうとうイカれたのよ！」

「どんな風に？ 大袈裟なのよ。あんたは……」

「違うの！！ 本当なんだって！ だって……」

暫くの沈黙が続き姉は叫んでいた。

「アイツの部屋。ピンクの壁紙で、カーテンとポスター【キティーちゃん】なんだよ……！」

反射神経

「何してるの？」

「ゲーム」

「何の？」

「レース」

「で、何してるの？」

俺はさっきゲームって言ったのにも関わらず、同じ事を聞いてくる姉がバカに思えた。

「だから、ゲーム」

「見たらわかる」

『じゃあ何で聞くんだよ!!』

俺はうんざりした顔になった。

「アネキは何が言いたいなの!？」

「いや、何してるのかなあ? って思ってた」

「バカか? アネキ。さっきゲームって言ったろ!!」

「バカとは何よ！！ バカとは！！」

「だってバカじゃねえか！！ 同じ事ばかり聞きやがって！」

「だってアンタ、さっきから体が左右に動いて揺れてるじゃん」
「え？」

俺は姉の顔を見た。

「アンタ、ゲームでカーブを曲がる度に体動してるよ」
「……………」

「だから、何してるのかなあって思ってたさ」
「と言つと部屋から出て行った。」

『無意識の反射神経って……。なんか、俺がバカみたいだな……………』

気持ち

「ここをこうすると……、これがこうなるだろ。という事は……
ここをこうして……。って！ ああー！ ダメか！ くそ！ じゃあ……この所を押さえておいて……。っと。ここをこう……。あっ
！ 違っ！ あー！！ 危ねえ！ だから……。こうしたら……。
！！ よっしやあー！！ 出来た！」

「何言ってるの？」

姉がノックもせず突然入って来ては、話し掛けてきた。もういつもの事なので気にならない。

「何？」

何の事だか分からない俺は首だけドアの方に向けて聞いた。

「あのね！ 聞いているのは私なの！」

姉は何かイライラしているようだ。

「だから何？」

全く状況が掴めず、もう一度聞く。すると姉は、

「アンタねえ！ 何を大きな声で言ってるの？ って聞いているの！
？」

とつぶ。

「俺何か言ったか？ 何言ってたんだアネキ。頭悪くなったのか？」
と考えていると

「ちょっと！ 何が言いたいのよ！！」

突然、姉がキレた。全く訳が分からない。

「だから何だって言うんだよ！」

と俺も逆ギレすると、姉は不思議そうな顔をして、

「アンタ。気付いてないの？」

と言ってくる。

「はあ！？ 何アネキ訳分かんねえ事言ってたんだ？」

と思っっているよ、

「アンタさあ……。考えている事、全部口から出てるよ……。気付いてないんだね」

と言って部屋から出て行った。

「考えている……。事？ 口から出てる？」

少し考えているよ、

「あゝ！！ 俺心の中でしゃべってるつもりで、マジでしゃべってた！」

と自分の行いに気が付き、うなだれた。

『結構、後味の悪い事、俺言ってたな。やべえ！！ 後でアネキ怖ええだろうなあ……。ハア』

作文

俺の家族を紹介します。

初めにアネキ。いつも俺の事をバカにしてくる。遠回しに言うので、腹が立つ事もしばしば。でも、仲が悪い訳ではない。俺はそう思っている。

次に母さん。どこから見ても、ただの天然。姉の言う事も、俺の言う事も聞いてるようで聞いてない。天然だから、突然訳のわからない事を言うこともよくある。

そして父さん。仕事以外は、ただのバカ。俺が言うのも何だけど、家族の前で意味不明な事を言ったり、突然とんでもない事をする。よくあれで、大黒柱が務まるなあ。

そして俺。この家の中で一番マトモ。考え方もやる事も。マトモ過ぎて、マトモじゃない人達には理解出来ないようだけど。

「ねえあんた。何してんの？」

『ほら来た。毎回の事ながら、この女はノックも知らねえのか！』
突然俺の横に現れた姉が尋ねてきた。

「何って宿題の作文」

今日はかなりマトモな事を言っている筈なので、姉は何も言い返せない筈だった。

「作文つて……。家族の紹介してどうするのよ！ しかも、むちゃくちゃな」

勝手に入ってきた挙げ句の果てに、勝手に人の作文を読んで、何かほざいてやがる。

「作文つて、文を作るから作文だろ。じゃあ、これだって立派な作文じゃねえか！」

今回の俺はマトモだ。胸を張ってそう思った。しかし姉は、

「あんた、相当のバカだわ……」

そう言い残して部屋から出ていった。

『あの女は……。いつもいつも。言いたい事言っ出ていきやがる。でも……。俺、何か間違えてるのか？』

策

『猿も木から落ちる』『弘法も筆の誤り』という。これは、どんなに卓越した者であつても、失敗する事はある。だから、素人が失敗をしたからと言って恥じる事もなければ、失敗により挫折する事もないという事だ。だから、俺が失敗したところで、誰も俺を咎める事なんて出来ないんだ』

姉はノックを知らない。他人の部屋に部屋に入る時、まるで自分の部屋に入るかのように普通に入ってくる。だから、今だって気が付いたら、もう俺の横に立っている。

「ねえ……。何、これ？」

姉は机の上から一枚の紙を取り上げた。

「紙」

俺はもう答えるのも億劫なので、愛想なく答えた。

「紙って……、アంత」

呆れて何も言えないようだ。

『うるさいから、そのまま黙ってる。そして、部屋から出ていけ』

と思っていると、姉は次第に顔が怒りだし、

「紙は分かってるわよ！ 何の紙なのよ！！」

と怒鳴ってきた。いつもの俺なら、ここでキレて怒鳴ってしまうのだが、今日は怒る気にもなれなかった。

「テスト」

また愛想のない返事をして、片肘を突いたまま姉を見る。

「そんなの分かるわよ!!」

そう怒鳴って、姉は部屋を飛び出していった。

『まただよ。「お母さん!」て言っぞ』

と思っていると、案の定

「お母さん! アイツ英語のテスト0点だよ!!」と聞こえてきた。

『ほらね。まっ、いいさ。……つと俺も行かないとな』

と思うと、机の引き出しから数枚の便箋の束を取り出すと、台所まで行った。

「アネキ! 彼氏にフラれたからって俺に八つ当たりするなよな!」

そう怒鳴ると、姉は

「どうしてそんな事アンタが知ってるのよ!!」

と怒り狂っている。俺はポケットの中から、さっきの便箋の束を取り出すと、机の上に置いた。

「な、な、なんでアンタがコレ持ってるのよ!!」

と机の上から便箋を取り上げると、自分のポケットにねじ込んだ。

「アネキの机の上にあった」

そう答えると、

「アンタ、私の部屋に勝手に入ったの!! 部屋に入る時はノックくらいしなさいよね! 常識でしょ!!」

と、怒鳴り散らし、怒り狂っていたが、

『人の事言えんのかよ……。人のふり見て我がふり直せ。常識が聞いて呆れる』

と思って、台所を後にした。後ろから、負け犬の遠吠えにしか聞こえないような罵声を聞きながら……。

『危ねえ！ アネキ、サンキュー！。これで今回の0点のお咎め無
しだな。アネキ。すまん！』

準備

『パスポートOK。筆記用具OK。お菓子OK。地図OK。保険証のコピーOK。財布OK。着替えOK。長靴OK。固形燃料OK。釣竿OK。バーベキューセットOK。飯ごうOK。寝袋OK。テントOK。救急箱OK。ロープOK。シャベルOK。ライトヘルメットOK。つるはしOK。方位磁石OK。非常食OK。十徳ナイフOK。発煙筒OK。GPSOK。』

「つとこんなものか？」

俺は大きなリュックサックとポストンバッグ、に荷物を確認しながら詰め込むと、ファスナーを閉め額の汗を拭った。

『そろそろ来るかな？』

と思しながら、ドアの方へ目を向けるが誰もいなかった。

『あれ？ いつもならここで「アンタねえ……」とくる筈なんだけど……』

と思っていると、

「こんな荷物持ってどこに行くの!？」

と突然背後で大きな声が聞こえた。

「うわあ!!! ……あ、アネキ……か。びっくりするじゃねえか! 突然大声出すんじゃないやねえよ! ……てか、何故ここにいるんだ

よ！！ ノックは常識じゃなかったのかよ！！」

あまりにビックリした為に、何やら腹が立ち怒鳴りつけた。が、姉は全然聞いていないようで、荷物をマジマジと眺めていた。

「ねえ……。アンタどこ行くの？」

珍しく真面目な顔で聞いてくるので、

「明日から家族旅行じゃねえか！ 忘れたのかよ！」

と答えると、姉は

「ハア……………」

と溜め息をついて出ていった。

『 一体何だよ！ 【備えあれば憂いなし】 って言葉知らねえのかよ
』！

「お母さん。アイツ、明日の旅行に何だかいっぱい持って行くつもりみたいだよ。……温泉に行くだけなのに……」

「あら、そう。ま、いいんじゃないの？ 私達は持ってあげないから」

風呂

頭を洗っている時、後ろに誰かいるような気配を感じる事はないだろうか。目を閉じ、背後を扉の方に向けたまま頭を洗う。初めは何も思わなかったのに、突然背後に寒気に似たおぞましい気配を感じる。『気のせい。気のせい』と思いつつ、頭の泡を洗い流し後ろを振り向くと誰もいない。こんな経験ありませんか？

俺は只今入浴中、そして洗髪中

『ほらきた。背後に感じる何かの気配。しかし、俺が気にするから、感じる気がするんだ』

俺は普通に頭を洗い、よく洗い流した後、後ろを勢いよい振り返った……。

『ほら、誰も……！』『うわあああ……！』

俺は思わず後ろに転倒し、大きな叫び声をあげた。

「どうした……！ 何かあったか！」

父さんが落ち着いた口調で聞いてくる。

「お、お、お、お前がいるからだろうが！ しかも、そんなお面付けやがって！」

俺の後ろには……、厳ついお面をつけた父が見下ろしていたのだっ

「どうしたの!? 何かあった!?!」

と母が飛び込んできたと思うと、俺の股間を見て、

「立派になったわねえ」

と言い残して去っていった。

父は父で、

「そんなにビックリしたか? まだまだ子供だな。ハッハッハッ!」

と呑気に笑っていた。その後、俺は父さんと久しぶりに風呂へ入った。背中を洗ってもらったりして。

『俺の家族は変なヤツばかりだな……。……っというか、母さんに裸見られた! 父さんのバカア!!--』

静寂

『静かだ。本当に静かだ。家族が一人抜けるだけで、こんなに静かになるものだろうか……』

姉は新しい彼氏と同棲するらしく、昨日荷物をまとめて出ていった。なんだかウキウキした姉を見送った時には、『これでやっと開放される』と思ったのだが。

『ハア……。静かだ。勉強……。でもするか』

教科書と参考書とノートを机の上に並べ、ページを開くと問題を解きながら書いていく。スラスラと問題を解けるのだが、なんだか物足りない。

『いつもならここで、「アンタ何してんの？」ってノックもせずに入ってきたアネキが邪魔してくるんだけど……。ハア……。静かだなあ』

頬杖を突いて、勉強などそっちのけでボくっとしていた。

コンコン。とドアをノックする音が聞こえる。

『誰？』

と思いつながら、

「誰え〜。入ってえ」

と返事する。

入ってきたのは父だった。

「どうした。ボクっとして。姉ちゃんか？」

と聞いてくる。

「うん。まあ……」

と返事をする。

「まあ、そんなにクヨクヨするなよ。死んだ訳じゃないんだから」

と言って出ていった。

「死んだ訳じゃ……か……」

と思っていると……

『うー!! 臭っ!! 臭え!! 父さん、マトモな事言って、屁こいて出て行きやがったな!! く、臭えええ!!』

姉がいなくなっても、俺の平穩はない……らしい。

悪戯

姉が出ていって、早くも三ヶ月が過ぎた。家族は何も変わった様子なく過ごしている。そういう俺も、もう姉がいない事に馴れてきていた。

ある日俺は、突然ある事を思い付いた。おもむろに、姉の部屋へと入っていった。姉の部屋は、出ていった時のまま置いてある。俺は本棚に近寄ると並べてある本を一冊ずつ丁寧に逆さにむけていった。全ての本を逆さにし、

『なんだか面白みに欠けるな』

と思い、部屋を後にした。

その後俺は部屋に戻って、財布を持って、ホームセンターに行つて、また姉の部屋へ行つてと大忙しだった。

『はあああ……、疲れたよ……』

と姉の部屋を出ると、なんだか臭い。いや臭過ぎる！ ふと、横を見るとズボンのお尻のところがプクツと膨らんだ父がいた。俺は思わず、台所に向かって叫んだ。

「母さん！！ 父さんがうこ漏らしてるぅー！！」

「嘘お！ またぁ！！」

暫く間を置いて返事が返ってきた。

俺はすぐさま自分の部屋へと駆け込むと、大きく深呼吸をした。

『ん？ また？ ……またって、初めてじゃないのかよ！！』

嘘お！

今日の俺はいつもの俺と少し違う。姉がいないから、ノックもせずに勝手に入ってくるバカもいねえ。だから……、友達から借りたエロ漫画（雑誌）をベッドの上で読んでいるんだ。

『おお！ うわっ！ えっ、そんな事しちゃうの！？』

夢中で雑誌を読んでいると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。急いで枕の下に雑誌を隠すと、本棚から適当な漫画を取りながら

「誰え？ どうぞ？」

と言って、また同じ姿勢に戻った。

入ってきたのは母だった。母は近くまで来ると、

「また、それ読んでのの？ 飽きないわねえ」

と言っていたが

「何？ 何か用事？」

と訊くと

「ちよつと……ね。後で台所まできてくれる？ ……それと、その本逆さまよ」

とだけ言つと、俺の返事も聞かずに部屋から出ていった。

『へ？ 逆さま……って、ああ！ 本当に逆さまに持つてる！
……しかも、本が枕の下からはみ出てるし……。もしかして……バ
シてる？』

なんて思いながら、雑誌をカバンに直すと、台所へ向かった。

『コレって【頭隠して尻隠さず】ってヤツだよな……』

台所に行くと、母が椅子に座って待っていた。

「何？」

と尋ねながら俺も椅子に座る。

「あのね……」

と暫くの間を置いて母が口を開いた。何を言われるのかと思うと、知らず知らずのうちに体に力が入る。

「あのね、アンタ医者になりなさい!!」

唐突に言った母の言葉の意味が分からずに

「は？」

と間の抜けた声が出た。

「だから、医者になりなさいって言ってるの!!」

とまた言う。

「どうして俺が医者にならないと……ってか、なれないし!!」

と反論すると、母は真っ直ぐリビングを指差し

「あんな風になりたくないでしょ!!」

と言った。おもわずリビングへ目をやる。……そこには、ズボンの中に手を入れ、尻を掻きながら、片肘で寝転んで、おかきを食べながらTVを観ている父がいた。

「そつだぞー!! こんな風になりたくないだろー!」

と重ねて父も言う。

『いやいや、父さん。そこは反論すると「うるじゃ……ないのか?」』

と思っているよ、

「という訳で「レー!」」

と母が言う。とテーブルの上に《ドン!》と音を立てて本の山が積まれた。

『えええ! マジでえ!』

と思っているよ、

「こんな風になるんじゃないぞー!」

と父が言う。

『だから、テメエがそれを言うなよ……』

と思いつつながら、本の山を持って部屋へと戻った。後ろから

「頑張つて勉強してねえ!」

という母の間の抜けた声と

「父さんみたいになるなよ〜！」

という父の声を聞きながら……。

『はああああ……。前途多難だ。これから、どうしよう……。…
…つてか父さん！！ 威厳も何もねえんだな！』

意気込み

【千里の道も一歩から】そんな言葉を聞いた気がする。今、俺に出来る事は、机に向かつてひたすら学ぶ事。現在学習中の域を逸脱し、基礎はもとより応用、そしてまたその応用までをも会得する。教材を開き、声に出しながら書く。目と耳と口と手をフル活用し、頭の中に知識を整理しながら、片付けていく。それが今、俺に出来る事。ただ唯一、俺に課せられた使命。

『なんだか部屋の外が騒がしい。しかし、俺にはやる事がある。野次馬根性を、こんなところで出している訳にはいかないんだ！』

その頃部屋の外では、同棲に失敗した姉が帰宅していた。

「ちよつと！ お母さんどいてよ！！」

姉は興奮し、俺の部屋へと押し入ろうとしていたのだ。しかし、それを母が阻止していた。

「駄目よ！ あの子、真面目に勉強しているのだから！」

懸命に止める母に対して

「アイツに、アイツに言わないといけない事があるのよ！！」

姉の興奮は治まらない。

「何！？ どうしたの!?!」

母も心配になったらしく、姉に尋ねる。

「ちょっと来てよ!」

と、姉に連れられて母が姉の部屋に入ると、……………そこには、壁・机・本棚・ベッド・カーテンに到まで真っ黒に染められた空間が広がっていた。

「……………」

母は絶句してしまった。

「だから！ アイツのところへ行かないといけないの!?!」

そう言うと、姉は部屋を飛び出し俺の部屋を勢いよく開けた。

「……………」

今度は姉が言葉をなくしていた。

「なんだよ。帰ってきたのかよ!」

と、俺が言うと

「なんなのよ、あの部屋!?!」

と、絞り出すような声で姉が叫んだ。

「ちょっと……ね」

と言いつつ、

「ちょっとじゃないわよ!」

と言ってから、もう一度俺の部屋を見渡すと、

「ちゃんと、片付けてよね!」

と言つて、部屋から出ていった。

「なんだよ。まったく!」

俺は愚痴をこぼすと、また机に向かった。

何事もまずは形からという。俺の部屋は今、レインボーだ。カラ

「コーディネートの本を読んだが、よく分からなかった。だから、
見ている気持ちの良い物……と考えて浮かんだのは『虹』だった。
だから、俺の部屋はレインボー。そこに俺の意気込みを貼っている。
『一日一善』『弱肉強食』『千里の道も一歩から』『働かざる者食
うべからず』『病は気から』『隣の客はよく柿食う客だ』『一触即
発』『焼肉定食』『二度ある事は三度ある』『仏の顔も三度まで』
『馬耳東風』『背水の陣』『四面楚歌』『生麦生米生卵』『灯台下
暗し』『井の中の蛙大海を知らず』『MY Dream!』『Ra
inbow Room!』」

「適当に書き過ぎだな……」。

姿勢

『気持ちの切り替えには髪型の変化が最も有効であると聞く。失恋を経験した女性が、気持ちの切り替えの為に、髪をバツサリと切り落とすというのは、よく聞く話だと思つ』

「ねえ……。勉強の途中、悪いんだけど……」

この女は『ノックは常識でしょ!!』と言いながら、ノックもせず
にいつも隣にやってくる。

「何!？」

俺はいつもの事なので、無愛想に返事した。

「その頭……」

『また頭の話か……』俺はうんざりした。今日、学校でも散々言われてきたばかりだ。それを家に帰ってきてても、このノックを知らない女に言われるとは……嫌になる。

「頭がどうしたの!？」

相変わらず無愛想に聞く。

「どづして、河童なの?」

どいつもこいつも、俺の頭を見て河童、河童と言いやがって……。

バカじゃないのか!?

「河童?」

そう聞き返すと、

「河童じゃない!! てっぺんハゲにして、周りの髪だけ残すなんて、どこからどう見ても河童にしか見えないわよ!」

呆れているのか、怒っているのか分からない口調でまくし立てられた。

「西暦1549年。日本にキリスト教を伝えた偉大なる宣教師……。フランシスコ・デ・ザビエル」

そう答えると

「ザビエル? ああ、フランシスコ・ザビエル。えっ! ザビエルカット!?!」

と小首を傾げた後、納得したのか、半ニヤの状態で「ザビエル……ね……」と言いながら出ていった。

まったく! どいつもこいつも【フランシスコ・ザビエル】などとぬかしやがって!! 正式名は【フランシスコ・デ・ザビエル】だ!

『ザビエルカット、そんなに目立つか？』

団欒

『【類は友を呼ぶ】そんな言葉がある。最近思うのだが、俺は一体誰に解説しているのだろう……。まあ兎にも角にも【類は友を呼ぶ】似たようなヤツが集まるっていう例えだ。例えば俺の家族がそうなのか？ いや俺の家は【烏合の衆】？ これも違うな。【鳶が鷹の子を産んだ】……。うーん、誰のどこが秀でているのか分からない。【蛙の子は蛙】……。コレが一番しっくりくるか……。』

今日は久方振りの一家団欒。いつもはバラバラの夕食に全員勢揃いしたのだ。

「どうだ、勉強は進んでいるか？」

いつもバラバラだから、話す事が見付からない。先陣を切って、向かいに座っているブリーフ一枚でメシを食う変態……。いやいや、父さんが訊いてきた。

「ああ。バッチリ！」

と適当に答える。

「まあ……。部屋に行く時はいつも勉強してるわね」

と隣のノックを常識と言いながら、ノックを知らない女。……。アネキが、疑いの眼差しを投げ掛けてくる。

「ああ。バッチリ！」

答えるのが面倒臭い。

「お父さんもお姉ちゃんも疑い過ぎよ。この子はやれば出来る子なんだから……」

斜め向かいの普段はボクっとしていた癖に、他人の悪口（特に父さんの）には饒舌になる俺の家では、マトモに分類されるであろう母が、二人を諭している。

「ああ。バツチリ！」

とりあえず、言うておく。

「アンタねえ……。さっきから聞いてれば、『ああ。バツチリ！』ばっかり言うて……！ ちゃんと聞いてるの……！」

突然、姉がキレた。

「ああ。バツチリ！」

コイツに答えるのが面倒臭い。

「おい！ お姉ちゃんが言っている事が分からないのか！」

ブリーフ一枚の変態……いやいや、だから父さんに怒鳴られた。

「ああ。バツチリ！」

今、俺に話し掛けるんじゃない！

「二人とも、邪魔しちゃダメよ。この子もちゃんと聞いてるわよ」
母が助けてくれた。

「ああ。バッチリ！」

『良かった』と胸を撫で下ろす。

「アンタ!!! 久しぶりの一家団欒でしょ!!! こんな時くらい勉強止めたら!!!」

姉が突然、参考書を取り上げた。

「アネキ! 何すんだよ!!! 今大事な文法を頭に入れてるトコなのに! 返せよ!」

取られた参考書を取り返そうとすると、姉は参考書を一目見て、

「これ何?」

と訊いてきた。

「参考書」

と答えると

「アンタ……高2よねえ?」

と言ってくる。

「一応……。年齢的には……」

と答えると、

「これ何？」

と同じ事を言っ。

「参考書」

と同じように答えると、

「いつの？」

と訊かれた。

「……………中2……………」

と答えた途端、

「アンタ本当に大学行く気あんの！？　ってか医師なんかになれんの！？」

と大声を出された。

「お姉ちゃん。コイツも頑張っているんだ！」

と父さんが言ってくれる。

『パンツ一枚で言われても、説得力が……』

と思っていると、

「そうよ。この前まで小学5年の理科を一生懸命勉強してたんだから……」

と母さんも助け舟。

『てか母さん、それ言い過ぎ……』

と思っていると、

「馬鹿馬鹿しい！」「ちそうさまー！」

と姉は箸を置いて部屋へと戻っていった。

『うるせえ……！ 英語は……苦手なんだ！ その他の科目は、もう、

高校を卒業してんだよー!!」

最終回

桜舞う季節の少し前、俺は高校生を終了した。一年間がこんなに短く感じたのは初めての経験だった。遊ぶ事も忘れ、苦手な英語の克服に全力で取り組み、気が付けば学年上位という成績に自分自身驚愕した。それもこれも、母のあの一言から始まったのだと思うと、父に感謝の気持ちすら覚える。

「あんな風になりたくないでしょ！」

と言っていた母。

「こんな風になるなよ！」

と言っていた父。

その結果、志望した大学の合格発表の日、母と涙を流して喜んだ。

そして今日、この桜舞う季節に俺は新たな出発をする。

行く先に広がるのは、果てしない広野のような学問という壁。それを、これから登って行かなければならない。まるで、危険なロッククライミングをするかの如く。『医者になる』そんな、途方もない夢に向かって進んで行くんだ。そう、こんな目眩さえも乗り越えて
！！

『母さん……、父さん……、アネキ……、今までありがとう。これからもっと頑張って、必ず医者になってみせるからな!』

「ねえ……。ねえってば! アンタ涎垂らして何をニヤニヤしてるのよ!!! 医者になるんでしょ!!! もう少し真面目に頑張りなさいよね!」

いつの間にか隣にいたノックを知らない女が、言いたい事だけ言って出て行った。

『いいじゃねえか!!! ちょっとくらい幸せな夢見たってよ!』

まあいいさ。これくらいが俺らしい。なあ、そう思うだろ!?!?
……勉強しよーっど。

最終回（後書き）

ご愛読頂きまして、誠にありがとうございました。

ただの短編を連載にいただけなので、前後の繋がりが特になく、面白みに欠けたかもしれません。

けれども、最後までお付き合い頂いた皆様には、感謝でございます。

これまで本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2626r/>

姉と俺（と母と父）

2011年6月5日20時59分発行